法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-03

天正本『太平記』巻三十八「政道雑談事」の現実認識 ： 巻三十五以降の考察を通して

LEE, Janghee / 李, 章姫

(出版者 / Publisher)
法政大学国際日本学研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学
(巻 / Volume)
19
(開始ページ / Start Page)
204(1)
(終了ページ / End Page)
181(24)
(発行年 / Year)
2022-02-10
(URL)
https://doi.org/10.15002/00025643

天正本『太平記』巻三十八「政道雑談事」の現実認識
―巻三十五以降の考察を通して―

李　章姫

一　はじめに

『太平記』の巻三十五「北野詣人世上雑談事」（以下、通称の「北野通夜物語」と称す）は、『太平記』後半部に当たり、室町幕府内で有力守護大名の権力争いが続くなか、北野天満宮で通夜をする三人がそれぞれ異なる見解に立脚し、乱世の原因について語り合い、将来を展望する挿話である。巻二十七「雲景未来記事」とともに、『太平記』を特徴づける政治批評記事として注目されたこの「北野通夜物語」は、多様な方面からの読みが論じられてきた。とりわけ本文に現れた思想の解釈や挿入故事の異同、仁木義長の没落譚を中断する章段の位置などといった問題が主に言及されてきたが、ここでは天正本の異同に注目する。巻二十二を欠く『太平記』古態本の形態に対して、これを補った後出本の形態を持つ天正本は、歴史的な事実に基づく改編や通俗的な記事の増補などが際立つ一方、南朝の正統性を認めるという古態性も窺える伝本と考証されている。[1] 成立してまもなく本文の改訂が進んだと思われる『太平記』の諸本のなかで、こうした特異な本文を持つ天正本の「北野通夜物語」には看過できない異同がある。まずは、章段の位置があげられる。天正

本は章段が巻三十五の中に挟まれる諸本のごとき配置をとらず、巻三十八に独立している。また、諸本に登場しない日野僧正頼意という人物が登場し、政道雑談を聞いた後、「懸ル乱レノ世ノ間モ又静カナル事モヤト憑ヲ残ス計ニテ」と悲観的に将来を展望する（流布本同）。諸本とのこうした違いには、どのような意識が働いていたのか。本稿では、天正本巻三十八の「北野通夜物語」を中心に、巻三十五以降の改編意識を考察する。

二　「北野通夜物語」をめぐる議論

まずは「北野通夜物語」の概要を神宮徴古館本に基づきまとめておく。[2] 足利尊氏の死後、延文三年（一三五八）十二月に征夷大将軍に就任した足利義詮は、翌年宮方を攻め、龍泉城・平石城等の南軍を退治して帰洛した。京の人々が喜ぶなか、幕府の諸大名の間では、畠山道誓を中心に仁木義長の誅討が企てられる。それを察知した義長は対抗したが、まもなく伊勢へ落ちた。一方、京都の混乱を聞いた和田・楠ら宮方が蜂起し、混乱の張本人である道誓は批判されて関東へ下向した。宮方の山名時氏も義長の降参、宮方蜂起に応じて、赤松勢を攻め落とした。その頃、北野の聖廟で会った三人の人物、すなわち、もと武士の遁世者、南朝に仕える儒者の雲客、門跡寺院で顕密を修行した法師は、今の世の乱れの原因とは何だろうかという主題で、以下のような談話をする。

・遁世者……本朝の故事を引き、善政を説く。[3]
・雲客……中国の故事を引き、君臣の道理を説く。
・法師の解説……天竺の故事を引き、天下が乱れる原因はただ因果業報によると説く。

三人はからからと笑って帰り、語り手（天正本・流布本では頼意）は、「是以案するに、此る乱の世間も又静る事もやと、恃しくそ覚ける」と、乱世もいつかは静まるだろうと期待を示して章段を結ぶ。

諸本において、この三人の政道雑談は、延文五年（一三六〇）に足利義詮が帰洛した以降、幕府の内紛とそれを機に発生した宮方の蜂起が複雑に展開していくなかでなされたものと設定されている。そして、本話はこのような乱世の現実を論じ、将来を展望するという役割を負っている。ここでまず注目されるのは、『太平記』の序の「察安危之来由、覆而無外天之徳也、明君体之保国家、載而無棄地之道也、良臣則之守社稷」に示す徳治主義が、君臣の道理に基づき、現幕府政権と宮方の政道を批判した遁世者・雲客の意見と呼応していることである。だが、二人の意見は、乱世の原因を因果業報の道理に求める法師の言説により否定される結論になっており、それを語り手は将来に対する楽観的な展望として受け入れている。こうした諸本の結語に関する議論の基盤を築いたのは永積安明氏である。氏は、「武家にも公家にも期待することができず、しかも仏教的な因果説にも完全にはおちつくことのできない、ほとんど絶望的な気持ちを物語るものである」と論じたが、[4]後に「『太平記』作者が、ほとんど絶望的な内乱の将来を、末法的でない因果観によって、意外にも楽観的に展望していることを示している」という論に転換した。[5]また、長谷川端氏はこれを「現実を直視することをやめた」と評し、[6]中西達治氏も「現実を見ることを拒絶」したとし、[7]結語を「楽観的」な展望として批判的に読んだ。一方、小秋元段氏は本章段を読み直し、「つまり、為政者が善政を行わなくても、政権がいかに無力無能であっても、人々の働きかけとは無関係に太平が訪れるときは訪れる。法師の言がこうした論理を生みだすものであったからこそ、作者は将来を頼もしく思えるといったのである。いうまでもなくこれも皮肉である」と新たな見解を示した。[8]

天正本では、「北野通夜物語」が巻三十八に独立したかたちで置かれている。仁木義長の没落譚を中断する諸本の「北野通夜物語」の位置に疑問を提示した長坂成行氏は、天正本の「自伊勢進宝剣事付黄粱夢事」と「北野通夜物語」の章段配列の異同に触れ、「天正本のこの傾向は、たしかに理解しやすく、事件の集中度をそぐことがない」として、天正本の配列は物語の理解に効果的であるとみた。[9]また、石田洵氏は天正本の「北野通夜物語」の位置の問題を取り上げ、天正本の政道雑談には「「過去の因果」により、批判してもどうにもならない現実を、むしろ積極的に肯定し、いくらかで

もよい「果」を待とうとする、開き直った姿勢が見られる」とした。そして、「「静かなる事」への期待には現実的な根拠はないが、実際、巻三十八の時期には、「安定に向かって見える現実が背景にあった」と論じ、「巻三十八の「北野通夜物語」が「うち続く戦乱に対して厭戦気分になっている同時代の人、作者、そして読み続けてきた読者にしてみれば、いわゆる第三部の後半になれば、この「政道雑談」を巻三十五に収めても、巻三十八を割り当てても、似たような認識があろう。すなわち道義的に問題を多く抱えていながらも天下の内乱が終息に向かっているという認識を予測として記す巻三十五と、認識しながらその後を期待する巻三十八の差かもしれない」と結論づけ、「予測」と「その後を期待する」ことにその差異があると論じた。[10] 一方、大坪亮介氏は、日野僧正頼意が「北野通夜物語」の「聞き手」となっていることに注目し、後醍醐天皇の霊と深く関わっていることを指摘し、[11] さらに『太平記』における「北野通夜物語」の構想を取り扱うなかで、「天正本では巻三十四に現れた怨霊が現実世界で幕府の仁木・細川・畠山といった幕府の有力守護を滅ぼす過程がまず描かれる。その後世が鎮まることへの期待が込められた「北野通夜物語」が配置され、結末へと向かう。つまり天正本では怨霊の計画→発動→「北野通夜物語」という展開を見せており、「北野通夜物語」は怨霊発動が完了したことを確認する機能を持つと思われる」と論じた。すなわち、巻三十四の怨霊記事と「北野通夜物語」の展開を関連づけているのである。[12]

だが天正本の巻三十八という位置の異同とともに、宮方の人物である頼意が登場し、彼の発言によって「北野通夜物語」が結ばれている点を考えるといまだ疑問が残る。頼意は果たして石田氏が論じたように、「天下の内乱が終息に向かっていると認識しながらその後を期待」し、「憑みを残して」帰ったのだろうか。このような疑問を解くため、以下、天正本の「北野通夜物語」にいたるまでの記事を確認し、本話を巻三十八に移動させたことや頼意が登場する意味に関して考察する。

三　天正本巻三十五以降における記事の簡略化

〈表1〉は、神宮徴古館本と天正本の巻三十五から巻三十八までを対照させたものである。各章段の内容は神宮徴古館本により、同記事に天正本に異同がある場合は番号を付してその内容を記した。この表をみると、天正本は「北野通夜物語」を巻三十八に移動させるものの、その他の章段の配列を変えるような再編成を行っていないことがわかる。天正本では巻三十五の章段の冒頭・末尾は同構成となっており、神宮徴古館本の巻三十六・三十七を巻三十六とし、神宮徴古館本の巻三十八を巻三十七に置くかたちとなっている。そして、巻三十八には「北野通夜物語」のみが置かれ、表には示さなかったが、巻三十九の冒頭は神宮徴古館本と同様、大内介の降参記事から始まる。

ここで天正本の改編として目立つのは、その記事の簡略化である。巻三十六・三十七の天正本の記事は、諸本に比して記述を大幅に簡略化したものが相当あるが、それらにはどのような意図が込められているのであろうか。それらは一定の意図のもと簡略化がなされたものと見受けられる。まずは、天正本において簡略化された記事を、〈表1〉の番号に従って通覧する。

①仁木義長排拆の企てにおいて、諸大名が義長を憎む理由を述べない。
②失脚して若狭に下った細川清氏が幕府方朝倉勢を退散させた記事がない。
③畠山兄弟が足利基氏の敵になった背景として、基氏が東国武士の要求を聞き入れたという原因を述べない。
④宮方の京都進攻の際に、清氏の戦略どおり、佐々木高秀らが撤退したことを述べない。
⑥大勢をもって越中に進出した宮方の桃井直常が、その過失によって敗れた経緯を述べない。
⑧九州探題斯波氏経が参戦した長者原の合戦で少弐勢が負け、宮方の菊池勢が勝利したのは大将の心によるとの評語がない。

〈表1〉神宮徴古館本・天正本巻三十五から巻三十八の記事内容と主要異同

	神宮徴古館本	天正本
35	諸大名擬討仁木事 諸大名重向天王寺事付仁木没落事 南方蜂起事付畠山下向事 山名中国発向事 **北野詣人世上雑談事** 土岐佐々木与仁木方軍事	①義長排除の理由簡略。 巻三十八へ
	①足利義詮の帰洛。諸大名、仁木義長を打つために企てる。 ・義長、諸大名の動きに対抗し、義詮を監禁。佐々木道誉の策で義詮は脱出、義長は伊勢へ落ちる。 ・大和・河内等の宮方が蜂起し、将軍方は落ちる。 ・畠山道誓、批判され関東下向。 ・山名時氏、義長の宮方降参や宮方の出兵に応じ、因幡・美作の赤松勢を攻め落とす。 ・天下の乱れの原因は武家方にも宮方によるものではなく、みな過去の因果によるものである。 ・尾張・三川・伊賀・伊勢国の仁木方、将軍方に敗れ、義長は長野城に籠る。	
36	仁木越州宮方降参事付大神宮御託宣事 諸国恠異事 天王寺造営事 変異御祈事付最勝講事 山名豆州落美作城事付筑紫合戦事 佐々木秀詮兄弟討死事 相模守清氏隠謀露顕事 頓宮四郎心易事付清氏参南帝事 畠山入道々誓没落事 南軍入洛京勢没落事	②幕府方朝倉勢逃亡記事なし。 ③畠山が敵となる経緯なし。 ④佐々木高秀ら敗戦経緯なし。
	・天災・疫病が続き康安に改元。義長、味方を失い南朝へ降参。 ・大地震が起こり、天王寺の金堂倒れる。 ・東寺で異変が起こり、最勝講を行う。 ・宮方の山名勢、美作へ発向し、赤松勢に勝ち、菊池勢は大友・少弐の大勢を破る。 ・和田・楠、佐々木秀詮兄弟に打ち勝つ。 ・細川清氏、道誉に謀叛と讒言され、失脚する。 ②頓宮の寝返り。清氏は宮方へ降参。 ③畠山兄弟、諸将に除外され伊豆へ落ち、敵となる。 ④宮方、清氏の策を用いて京を攻め、入京する。	

37	38
主上還幸事 清氏渡四国事 可立大将事付義帝立将事 尾張左衛門佐遁世事付異国本朝道入物語事 畠山入道謀叛事付楊国忠事	悪星出現事付湖水干上事 宮方蜂起事付桃井没落事 筑紫探題下向事付李将軍沈女事 菊池大友合戦事 畠山入道遂電事 相模守清氏討死付西長尾城没落事 接津合戦事 年号改元事付大元軍事
⑤後光厳天皇の還幸。 ・宮に期待され、大将に任じられた清氏は、勢力がつかず阿波国へ退く。 ・不義の清氏を大将に立てたことへの批評。 ・執事の有力候補だった斯波氏頼は、父道朝の偏愛で執事職に就かず出家す。 ・道誓、足利基氏に責められ、修禅寺に籠る。道誓の謀は安禄山のそれに似ている。	・康安二年二月より、天変地異が続く。 ⑥時氏ら宮方が各地で蜂起したが敗戦。足利直冬は宮入道に敗れ、桃井直常も富樫勢に負ける。 ⑦斯波氏経、大友・少弐に合力するため九州探題に派遣されるが、軍勢・兵力はつかない。 ⑧菊池武光、探題氏経勢を打ち散らす。 ⑨畠山郎党の没落。義深は脱出後赦免、道誓・国熙兄弟は没する。 ⑩頼之、讃岐で挙兵した清氏を謀って討つ。西長尾城も落ち、四国は頼之が平定する。 ⑪和田・楠摂津国で挙兵し、佐々木の代官箕浦に打ち勝ち、湊川まで進むが、引き返す。 ・貞治と改元。

36	37	38
・西園寺亭還幸・生活増補。	⑥直常の敗戦経緯なし。 ⑦氏経遁世記事あり。 ⑧勝敗の原因の評語なし。 ⑨義深脱出記事なし。誉田父子のことあり。畠山後日譚に異同。 ⑩細川頼和・信氏の退却記事なし。 ⑪箕浦の敗戦記事簡略。	**三人於聖廟物語事**

⑩讃岐の清氏が細川頼之の謀によって討死した際、兄弟の頼和・信氏が西長尾城で負けて退却し、頼之が四国を制圧したことを述べない。

⑪和田・楠が摂津の合戦で箕浦俊定らを撃退した詳細を述べない。

このように列挙してみると、簡略化の対象となった記事は、巻三十四「諸軍勢退散事」でその没落が予告され、巻三十五以降の展開の中心となる人物である仁木義長、細川清氏、畠山国清のみならず、他の軍勢や宮方の合戦記事なども交えられ、これらを一筋に把握するのは容易なことではない。[13] だが、これらの記事にはいくつかの方向性が存在するとも考えられる。以下、詳細に検討していきたい。

四　細川清氏関連記事をめぐって

『太平記』の後半部は、中西達治氏が「足利政権が確立されるまでの苦悩の歴史を記している」と述べたように、[14] 幕府政権を支える有力守護大名らによる闘争がいたるところに描かれている。そのなかでも、細川清氏の失脚・没落の記事は様々な印象深いエピソードを持つが、右に示した②④の記事は、清氏の失脚前後の場面のものである。

清氏の失脚に関して『太平記』は、「事の根源をたつぬれは、佐々木佐渡判官入道と細川相模守と、内々恨をふくむ事の有しによりて、遂に豺狼の心を結とそ聞し」（神宮徴古館本巻三十六「相模守清氏陰謀露顕事」）のように、清氏と佐々木道誉の不和を背景に描いている。将軍を呪詛したとの道誉の告発によって、ついに謀反の罪を着せられた清氏は、自分の領国であった若狭国に落ち、そこで斯波氏頼を大将とする敵を迎える際、まず先鋒の朝倉勢を退散させる。以下に②の記事を引く。

神宮徴古館本巻三十六「頓宮四郎心易事付清氏参南帝事」

相模守大に嘲笑て、穴哀の者共や、此等を敵に請ては力者二、三人を杙材棒衝せて、差向たらんに不足あるまし、先敦賀津に朝倉某か先打に陣を取たらんなる打散せとて、中間を八人差遣さる、八人の中間共、敦賀津え紛いり、浜面の在家十余箇所に火をつけて、鬨声をそ上たりける、朝倉か兵三百余騎、鬨声におとろきて、其也、相模守か寄たるは、定て大勢にてそ有らん、挽て後陣の勢に加はれとて、矢の一をも不射、敦賀の陣を挽けれは、相随ふ兵三百余騎、馬・物具を執すて、越前国府えそ逃たりける、其はこそ思つる事よと、毎人に言弄ふと沙汰せしかは、尾張左衛門佐大忿て、頓て大勢を率して、十月廿九にち椿獄え打向、

天正本巻三十六「新将軍不例細川相模守京都没落南方降参事」

相模入道大ニアサ笑テ、是等ヲ敵ニ請テ、物トヤ思フヘキ、清氏馳向マテモナク、若堂中間共少々指向ル物ナレハ、近付事アルマシキ物ヲト宣給ケレハ、尾張左衛門佐氏頼是ヲ聞キ、大ニ忿テ、軈テ大勢ヲ率テ、十月二十九日椿カ峠エ打向給ケレハ、

右の神宮徴古館本では、清氏がわずか八人の中間を用いて三百余騎の朝倉勢を撃退したという詳細な記事が存在する。これに対して天正本では傍線部のとおり、この間の経緯を一切記さず、清氏の大言壮語を聞きつけた斯波勢が怒って出陣してくるという叙述になっている。そして、引用した記事の後、清氏は戦略を模索していたところ、腹心の部下であった頓宮四郎に寝返られ、石塔頼房を仲介にして宮方へ降参する。右のように天正本では、宮方への降参につながる場面において、清氏の勇将としての面貌を述べず、道誉の讒によって罪を着せられた清氏が、頼りにしていた家臣に寝返られ、宮方へ降参する境遇に陥ると描かれているのである。(15)

そして、④は清氏が宮方に降参した後の記事である。先に述べた②以降の展開で、『太平記』は、清氏が猶子仁木頼夏と従弟の氏春の加勢を受け、摂津・阿波の宮方とともに挙兵したことを述べ、「京都以外に周章して、又はや世乱出来ぬと危まぬ人も無かりけり」と京都の不安を伝える。しかし、こうした実態にも将軍義詮は、「近国は縦起とも、坂東八箇

国の勢を召上せて退治せんに、何程の事か可有とて、強に騒く気色も無かりける」と安易な態度をとっていたが、畠山兄弟が敵になった経緯を伝え、今度は「東国・西国・東山道、一度に何様起合ぬと、洛中の貴賤騒合り」と、幕府にとって危機となったことが述べられる。この時、清氏は今の情勢を読んで、宮方のため京都進攻を献策する。この策を受けて宮方の軍勢が京へ向かうと、清氏の予見どおり、幕府方が次々と撤退する。以下に本文を引く。

神宮徴古館本巻三十六「南軍入洛京勢没落事」

実も相模守の被言つるに少も違はす、忍頂寺の麓を打通に、佐々木治部少輔は時の侍所なり、甥二人まて当国にて楠に被討ぬ、此にてそ先日の耻をすゝかんと、手痛き戦は為すらんと、思設て通けるに、高秀、相模守に機を被呑て臆してや有けん、矢の一をも射懸す、おめ〳〵とこそ通けれ、さては山崎にてそ一戦有すらめと思繕ふ処に、今川伊与守も不叶とや思けん、一闘も闘はて鳥羽秋山え引退、是之、此彼に陣を取たる勢共、いまた敵も近さる先に落支度をのみ為ける間、角ては合戦墓々からし、先都を落てこそ、東国・北国の勢をも待めとて、持明院主上を警固たてまつり、同八日暁、宰相中将義詮朝臣、苦集滅道をへて勢多をわたり、近江の武佐寺え落たまふ、

天正本巻三十六「細川相州京都攻被給合戦事」

真ニ相模守ノ言ニ些シモ不違、忍頂寺ヨリ初テハ、道々ノ京勢皆引返ケレハ、清氏安々ト都エソ被攻入ケル、猿程ニ、東寺ニ将軍ヲ守護シ奉テ集居タル勢モ、如何思ヒケム、五キ十キ落行キケル間、覚テハ洛中ノ合戦ハ不叶ケリトテ、同八日暁、新将軍ハ各々目路ヲ経テ、江州武佐寺エソ落給ケル、

神宮徴古館本では幕府方の佐々木高秀が臆して山崎で一戦もせず、また今川貞世も戦わず逃げたと叙述されている。しかし、天正本では傍線部のとおり、佐々木高秀らの動静を伝える記事を欠き、「清氏安々ト都エソ被攻入ケル」と述べるのみで、清氏の予見の的確さが諸本ほど効果的には描かれていない。このように、清氏が宮方へ降参する前後に隣接する記事②④を見てみると、天正本の記事の簡略化には、彼の勇将として活躍した様子や戦略の確かさを諸本に比して

十分に描かないところに改編が認められる。

五　仁木義長・畠山道誓兄弟の没落をめぐって

次にみるのは、二人の大名の没落記事の簡略化である。『太平記』巻三十五以降に展開される諸大名の没落は幕府内部の権力抗争に深く関わり、仁木義長の排斥を主導したという畠山道誓は[16]、足利基氏に排除され没落し、義長の失脚後、権力を握るかと思われた細川清氏は、やがて佐々木道誉によって失脚するといった具合である。義長・道誓の没落は、先に述べた清氏の宮方降参の前のことで、巻三十五・三十六に描かれているが、天正本にはこれら内紛の原因を十分に描かず、簡略な記事に改める傾向がある。例えば、①に示した巻三十五の仁木義長を排斥する謀議の記事において、諸本と天正本は次のような違いを示す。

神宮徴古館本巻三十五「諸大名擬打仁木事」

只此次に仁木を対治せられて、宰相中将殿の御世務を助申され候はゝ、故将軍も草陰にては、嬉敷こそ被覚候はんすれ、方々如何被覚候とそ被問ける、先細川相模守は、今度南方の合戦の時、仁木越後守、三川の星野・行明等が、守護の手に不属して、相模守の手に属たる事を忿て、彼等か跡を欠所になして家人共に宛行はれたりしを、所存に違して被思ける人なり、土岐大膳大夫入道は、故土岐頼遠か息左馬助を仁木猶子にして、動は善忠か所領をとりて左馬助に申与とするを、鬱憤する時節なり、佐々木六角判官入道は、多年御敵なりし高山をうちて其跡を給たるを、仁木建武の合戦の時恩賞に申給たりし所なりとて、押て知行せんとするを遺恨におもふ人なり、同佐渡判官入道は、身にとりて仁木に指たる宿意は無けれとも、余に傍若無人にふるまふ事を狼藉に目に懸ける時分なり、されは、畠山・細川・土岐・佐々木まて、義長を悪しとおもふ人なりけれは、何も異議に及はす、只此次に彼をうちて世を治より

外の事無とて、面々一同にそ被同ける、

天正本巻三十五「諸大名擬誅義長事」

只此次ニ仁木ヲ退治セラレテ、宰相中将殿ノ御世務ヲ助ケ申サレ候ハヽ、故将軍モ草ノ陰ニテ定テ嬉シクコソ被レ思食候ハンスレ、旁ハイカヽ、思食サレ候フトソ問ケル、細川相模守、土岐、佐々木、皆義長ヲ悪ト思フ人々也ケレハ、何レモ異儀ニ及ハス、只此次ニ彼ヲ打テ世ヲ静メンヨリ外ノ事候ハシト、面々一同ニソ同セラレケル、

右を確認すると、神宮徴古館本が義長をめぐり、清氏・土岐・六角らとの所領をめぐる紛争が存在したことや、佐々木道誉に傍若無人な振舞いを憎まれていたことなどの具体的な理由を述べて、諸大名が義長を討とうとしたことを伝えているのに対し、天正本は傍線部のように、「皆義長ヲ悪ト思フ人々也ケレハ」と、簡略に述べるにとどめている。

また、巻三十六で義長が宮方に降参した際、武者所の者どもがこれを批評する場面においても以下のような違いが見られる。

神宮徴古館本巻三十六「仁木越州宮方降参事付大神宮御託宣事」

今又仁木越後守義長か、大敵に被囲たるか難堪さに寄に参へき由をまふすを、諸卿許容たまふこそ心えね、彼か平生の振廻悪として不造といふ事なし、聊も心にさかふ時は、咎なきに人をころして誤れりと思はす、少しも機にあふ時は、忠なきに賞をあたえて忽に取返す、先多年の芳恩をわすれて、義詮朝臣をそむく程の者なれは、君の御為に深く忠義を存へしや、四箇国の管領を尚飽足すおもひし程の心なれは、此方の五箇所・三箇所の恩賞を物数とも思へからす、若又彼か所存のことく恩賞を行はれは、日本六十六箇国に一所も所残有へからす、多年旧功の官軍共、何所にか身を置くへき、倩これを思ふに、忠臣にあらす、智臣にあらす、仏神にはなたれ、人望にそむきて、自滅せんとする悪人を寄に被成たれはとて、是豈聖運の助とならんや、只虎をやしなつて自患をまねく風情なるへきなと申けれは、

天正本巻三十六「年号改元仁木義長参南帝事」

今又仁木義長大敵ニ囲レテ、無二為方一ニ御方ニ参スヘキ由ヲ申ヲ、諸卿許容シ給コソ、先多年ノ芳恩ヲ忘テ、義詮朝臣ヲ背ク程ノ意ナレハ、君ノ御為ニ深ク忠義ヲ存スヘキニアラス、四ヶ国ノ守護職ヲ猶アキタラス思フ程ノ心ナレハ、コナタノ五ヶ所三ヶ所ノ恩賞ヲ不足ナシト思フヘシヤ、若又彼カ所存ノコトク恩賞ヲ行ハレハ、聖運ノ助トナラムヤ、只虎ヲ養テ自ラ患ヲ招ク風情ナルヘキ物ヲト申ケレハ、

神宮徴古館本では右にみるように義長に対して非道な振る舞いが多く、恩賞に貪欲で、仏神に見捨てられ、人望に背いた自滅する、悪人であるとする詳細な議論を述べる。しかしここでも天正本は、義長が恩賞に対する欲心から行動する人物であるとだけ批評する。また、諸本では本章段に義長の悪行を並べ、その自滅を予想させる内容になっているのだが、天正本では右に見るように、義長に対する簡潔な批判にとどめている。[17]

次に③⑨にあげた畠山道誓やその兄弟に関する記述も確認しよう。③は、延文の年号が不吉であったため、康安に改元したにもかかわらず京都には不吉な災害が続くなか、失脚した仁木義長と細川清氏が宮方へ降参した頃、関東より執事として足利基氏に仕えていた畠山道誓の謀反の報告が到来する場面である。

神宮徴古館本巻三十六「畠山入道々誓没落事」

宰相中将殿は、畿内の蜂起をきゝて、近国は縦起とも、坂東八箇国の勢を召上せて退治せんに、何程の事か可有とて、強に騒く気色も無かりける処に、十二月三日関東より飛脚到来して、畠山入道々誓・舎弟尾張守御敵になりて、官軍催促に不応とそ申ける、その濫觴何事そと尋は、去々年冬、畠山入道南方退治の大将として上洛せし時、東八箇国の大名・小名数を尽てそ上ける、…（中略）…宗徒者共千余人、神水をのみて、所詮畠山入道を執権に召仕はれは、毎事御成敗に随ましき由を、左馬頭殿えそ訴申ける、下として上をはからふ嗷訴、下剋上の至かなと、心中には憤思はれけれとも、此者共に被背なは、東国一日も無為なるましと欲て、頓て畠山許え使者を立られ、

天正本巻三十六「畠山入道舎弟尾張守謀叛事」

宰相中将殿ハ、畿内ノ蜂起ヲ聞テ、近国ハ縦起共、坂東静ナラハ、東八ケ国ノ勢ヲ召上テ退治セムニ、何程ノ事カ有ヘキトテ、強サワク気色モ御座サリケル処ニ、十一月十三日関東ヨリ飛脚到来シテ畠山入道道誓、舎弟尾張守義深、御不審蒙テ、伊豆国ニ楯籠ル間、東国ノ路塞テ、官軍催ニ応ゼスト注進ス、サテハ東国難儀ノ至極也、西国山陽モ何様起合ナムスト、京中ノ貴賤何シカ周章アエリ、

神宮徴古館本では、道誓が幕府に背いた理由として、将軍義詮の畿内制圧に力を合わせるため上洛した時、東国武士たちが無断帰国したため、道誓がその所領を没収し、これに反発した武士たちの要求を基氏が受け入れた点にあると詳細に述べている。しかし、天正本ではまったくこれらの状況が書かれておらず、傍線部のように「御不審蒙テ、伊豆国ニ楯籠ル間」と簡略に記されるだけである。先に述べた仁木義長の記事と同様に、幕府の内紛の詳細な状況を追究せず、簡略化する傾向があることが指摘できよう。

加えて、⑨の記事も確認したい。基氏に降伏後遂電した畠山兄弟の行方は諸本の間に異同が多いが、天正本には神宮徴古館本に比して以下のような独自の記述がある。

神宮徴古館本巻三十八「畠山入道遂電事」

畠山入道兄弟は、甲斐なき命をたすかりて、七条道場え夜半計に落着たりけるを、聖憐労たてまつりて、道の案内者を差そへ、行路の資等用意して、南方えそ被贈ける、道誓暫は宇智郡の在家に立宿て、楠方え降参の綸旨を申て給候へと被憑たりけれとも、南方の公議御許容の分も無かりけれは、宇智郡にも隠得す、都えは帰へき方もなし、山城脇辺に兎ある禅院・律寺、或は柴庵・草宿に身をよせて、命をおしと歎けるか、幾程もなくて兄弟共に墓なく成けるこそ哀なれ、…（中略）…此人に出抜れて被討し新田左兵衛佐義興、去年怨霊となりて吉野御庵え参し、畠山入道をは義興か手にかけて、生なから軍門に耻を令曝候ふへしと奏申ける由先て披露ありしか、疎事にては無

かりけりと、今こそ思知れたれ、

天正本巻三十七「畠山道誓関東没落事」

其ノ後、畠山入道兄弟ハ、路次無二子細一京着有テ、七条道場ニ且ク隠居玉シカ、尚其ノ憚有トテ、古ノ喜撰法師カ都ノ巽ト詠シタリシ宇治ノ辺ニ由来ヲ尋、吾カ廬占テ、中々安閑ヲソ楽玉ケル、角テ日数ヲ経ル程ニ、上意無二子細一、宥免ノ御サタ有テ、尾張守義深、式部大夫国熙召出サルルノミナラス、摂州中嶋ノ強敵ヲ静メ、且ク南国ノ堅メニテ有シカ、無レ幾程越前国守護職ヲ玉ヒ、忽ニ絶トスル一家ヲ起ス、人間ノ過福ハ如二糾索一ト云ヒナカラ、不思議ナリシ事共也、

右のように、神宮徴古館本では畠山兄弟が宮方へ降参しようとしたが、窮死したとするが、天正本ではこうした詞章と異なり、彼らは隠遁生活を送った後、道誓の弟義深らは再び幕府へ帰順し、繁栄したとする。このように天正本では、畠山一門の不幸が幸福へ転じることに驚きを示しながら、その顚末を述べている。天正本の描く畠山兄弟の没落譚は、新田義興の祟りによる没落と描く諸本と異なることは確かである。(18)

以上に述べてきたことをまとめると、仁木義長・畠山道誓兄弟の没落を描く天正本の記事は、幕府の権力抗争の様相を詳細に述べない姿勢が窺える。また、畠山兄弟の末路については、新田義興の怨霊により没落するという構想が失われ、逆に幕府に帰した結果までを描いているところに特徴がある。

これまで天正本の巻三十五以降の簡略化された記事を人物中心に述べてきたが、以下のような傾向があるといえよう。まず、天正本で語られる細川清氏は、とりわけ宮方へ降参する前後の記事において、勇将的側面や戦略の確かさが諸本に比して十分に描かれていない。結果的に、清氏を大将とし、京都を奪回しながらも直ちに退去した宮方の勢いを脆弱なものと捉えているといえよう。

次に、幕府政権を大きく揺るがした大名らの権力争いを描く過程では、その内紛の原因を十分追究せず、簡略な記事

に改める傾向がある。[19] また、諸本の巻三十四「諸軍勢退散事」で上北面の夢を通して、自滅することが予告されている仁木義長や畠山道誓が、予告に符合した叙述となっておらず、結局のところ宮方の怨霊の計画は霧散したかたちとなっている。

六　天正本の現実認識

これまで、天正本が巻三十五より巻三十八の「北野通夜物語」にいたるまで、他本より簡略な記事を持っていることに注目し、その傾向に宮方の勢いを脆弱なものと捉えようとしている点があることを指摘した。そのことを踏まえてここでは、天正本の「北野通夜物語」をめぐる構成や設定に再び注目する。

先に諸本の巻三十五「北野詣人世上雑談事」を確認すると、その前章段である「山名中国発向事」の末尾は、仁木義長が宮方に降参したことや和田・楠勢の出兵を受けて機に乗じた山名時氏が、赤松勢を攻め落としたことに対して「唇竭て歯寒し、魯酒薄して邯鄲囲りとは、彼様の事をや申すへきと思はぬ人も無かりけり」と評することで結ばれている。すなわち、密接に関わり合った一方が亡ぶと、他方も亡ぶこと、そして、幕府方の軍勢が宮方によって予想外に撃退されたことを述べる。[20] これは諸本の「北野通夜物語」の政道雑談にさきだつ状況認識であろう。幕府の内紛がもたらした世の混乱や危機に直面した時期に、乱世の原因を論じ合おうというのが、諸本の「北野通夜物語」の立脚点であると思われる。[21]

それに対して、天正本巻三十八「北野通夜物語」の背景は、どのように描かれているだろう。康安二年（一三六二）のことを描く巻三十七は、終局部の「和田楠打出摂州事」で宮方の和田・楠が箕浦勢に勝利するものの、それ以上進撃はせず、引き返したことが記され、これを「太元與宋朝合戦事」で結ばれる。その冒頭を以下に引く。

天正本巻三十七「太元與宋朝合戦事」

懸シカハ、都ニハ同九月晦日改元有テ、貞治元年トソ申ケル、コレハ天地人ノ三災起合テ、殊更南方ノ敵軍気ヲ得タリシカハ、康安ノ年号ハ不吉也ケリトテ、俄ニ改元トソ聞エシ、誠ニモ改元ニヤ依タリケン、津国ノ敵和田、楠ハ尼崎、西宮ヲ引テ、河内国ヘソ帰ケル、ヤカテ此ノ官領足利修理大夫入道、大勢ヲ指下シカハ、国ハ無為ニソ成ニケル、是ヲ聞テ山名伊豆守時氏、丹波ノ和久ニ陣ヲ取テ数日ヲ送シモ、因幡国ヘ引キ帰サル、思ハスニ今季天下同時ニ乱合テ、宮方既ニ眉ヲ開ト見ヘシカ、程ナク国々静ヌル事、天運トハ謂ナカラ、先ハ細川相模守清氏カ粗忽ノ軍シテ、打死セシニ依也、

ここでは康安から貞治へと改元したことから語りはじめるが、「康安ノ年号ハ不吉也ケリトテ、俄ニ改元トソ聞エシ、誠ニモ改元ニヤ依タリケン、津国ノ敵和田、楠ハ尼崎、西宮ヲ引テ、河内国ヘソ帰ケル」と、和田・楠勢が大きな勝利を得たにもかかわらず、河内へ引き返したことを改元の効果といい、また、「宮方既ニ眉ヲ開ト見ヘシカ、程ナク国々静ヌル事」と宮方の世が訪れると思っていたところ、幕府方にとって平穏な世になったと述べている。[22] この叙述は諸本にもある認識だが、この後に「北野通夜物語」が置かれていることが重要であろう。

天正本の巻三十八では、そうした頃、「近曾日野僧正頼意、偸ニ吉野ノ山中ヲ出テ、聊宿願ノ事アリケレハ、霊験ノ新ナル事ヲ憑奉リ、北野ノ聖廟ニ通夜シ侍リシニ」と、南朝に仕えていた頼意僧正が登場することに注目したい。[23] 諸本がこの三人の政道雑談を作者の視点で語るのに対して、天正本は宮方の人物の視点から語ろうとしているのである。[24]「北野通夜物語」が置かれる位置を踏まえてこれを言い換えると、天正本は幕府にとって静謐が感じられた時点で、逆に、宮方にとっては将来への希望がほとんど見えなくなった時点で、宮方頼意の視点から政道雑談が目撃されたという設定になっている。

ここで頼意は三人の雑談を聞くだけではなく、その後に「懸ル乱レノ世ノ間モ又静カナル事モヤト憑ヲ残ス計ニテ」

との感想を抱いて帰ったとする。「憑ヲ残ス計ニテ」の部分は、諸本の「恃しくそ覚ける」と比べると明らかに悲観的な様子を表しており、頼意はまさに「期待を残すばかり」で帰っていたのである。先に引いたように、巻三十七の末尾で、宮方による太平の時代が到来しなかったことを諸本は明確に述べていた。このような状況で宮方の人物頼意が、世の治乱は現世の所為ではなく、前世の因によって定まるという法師の因果論を聞いたのである。巻三十五以降からこの巻三十八にいたるまで、宮方は幕府の内紛に乗じて各地で挙兵し、一時ではありながらも、京都を奪回した。しかし、これらの奮闘を持ってしても世が定まらないという理を聞いた頼意は、「又静カナル事モヤト」という期待を述べる以上のことはできなかったのである。いうまでもなく、ここで頼意が抱いた期待とは、将来へ寄せた期待というよりも、厳しい現実認識に基づいた、宮方にとって名ばかりの期待であったというべきであろう。

七　おわりに

天正本は「北野通夜物語」を巻三十八の位置に置き、諸本の巻三十六から三十八までを二巻にまとめており、諸所に簡略な記事が散見される。天正本における簡略化された記事は、幕府より失脚して降参し、宮方にとっては大きな力となり期待されていた細川清氏に関するものが典型的な存在である。彼の戦略や勇将としての様子を描かず、その気勢は諸本に比して弱められている。また、幕府の内紛の重要な原因を詳細に扱っておらず、幕府の内訌の根源を追究していない。これらの記事を受け、天正本の「北野通夜物語」で三人の政道雑談を聞いた宮方の人物頼意は「懸ル乱レノ世ノ間モ又静カナル事モヤト憑ヲ残ス計ニテ」と、もはや宮方による太平の世が訪れることはないと認識し、将来への名ばかりの期待を寄せるだけで去ってゆくことが語られている。

天正本巻三十八「北野通夜物語」の大きな特徴はこれまで述べてきたように、諸本巻三十五「北野通夜物語」と語り

を行う時点が異なっている点であろう。すなわち、諸本は、巻三十五「山名中国発向事」に続き幕府政権の内紛で宮方が蜂起した時期であったが、天正本は巻三十七「太元與宋朝合戦事」に続き、宮方の勢いが大きく後退した時点であった。こうした改編の指向は、政道雑談を目撃した人物として宮方の頼意を登場させたことにも対応していると思われる。天正本の「懸ル乱レノ世ノ間モ又静カナル事モヤト憑ヲ残ス計ニテ」という、悲観的な結び方には、宮方の衰退を宮方の人物が確認する点に意味があったのである。

かつて鈴木登美恵氏は、天正本において「南朝寄りの立場に立つ叙述」があることを指摘したが、[25]天正本巻三十八「北野通夜物語」を中心にしたこれまでの考察からみると、天正本は、幕府の内紛に機を得た宮方の蜂起が失敗した歴史を、諸本よりも厳しく認識していたのである。

註

（1）鈴木登美恵「天正本太平記の考察」（『中世文学』第十二号、一九六七年）、同「古態の『太平記』の考察―皇位継承記事をめぐって―」（『国文学』第三十六巻、第二号、一九九一年二月号）参照。

（2）「北野通夜物語」の古態とみられる神田本でこれを示すのが妥当であるが、本稿では天正本巻三十八の「北野通夜物語」にいたるまでの記事を検討するため、巻三十五から巻三十八までの本文を完備する神宮徴古館本によって確認する。

（3）遁世者が引く本朝の故事に関しては異同がある。神宮徴古館本は「民苦問使事」「日蔵上人事」「泰時法談事」「時頼廻国事」「貞時廻国事」「青砥左衛門尉事」を持つが、天正本はこのうち「民苦問使事」「日蔵上人事」を持たない。一方、神田本は「時頼廻国事」「青砥左衛門尉事」のみを持ち、鈴木登美恵「古態の太平記の性格―本文改訂の面からの考察―」（『軍記と語り物』第九号、一九七二年）は、本朝・震旦・天竺の故事を二話ずつ持つ神田本のかたちを、もっとも古いかたちとみている。

（4）永積安明『続日本古典読本Ⅴ太平記』（日本評論社、一九四八年）。

（5）永積安明『中世文学の展望』「太平記論」（東京大学出版会、一九五六年）。ここでは、註（4）前掲書の論述とは相反する見

解をみせている。小秋元段『太平記・梅松論の研究』第三章「因果論の位相―巻三十五「北野通夜物語」論序説―」（汲古書院、二〇〇五年。初出、二〇〇四年）が指摘したように、両論考が用いた底本はそれぞれ異なり、註（4）では流布本を、註（5）所引論文では西源院本を使用している。後に、永積は『古典を読む太平記』（岩波同時代ライブラリー、一九九八年、初版は一九八四年）において、両本文を取り上げ、両本とも乱世がおさまることに対して、不安や不信感を持っていることと解釈している。

（6）長谷川端『太平記の研究』Ⅰ「北野通夜物語にあらわれた政道観」（汲古書院、一九八二年。初出、一九五九年）。

（7）中西達治『太平記論序説』Ⅰ「太平記の思想的背景」（桜楓社、一九八五年。初出、一九六八年）。

（8）小秋元段註（5）前掲論文。また、松尾葦江「太平記の意思」（『軍記物語論究』若草書房、一九九六年。初出、一九九四年）は、「答えを出さずに潰えても潰えても意志し続けることの出来る強さだ」と述べ、この結語は将来を展望しているとはせず、『太平記』（作者）の強い「意思」として評価した。この他、法師が引く仏教故事に焦点を当て考察した論考に、濱﨑志津子「太平記北野通夜物語の〈因果観〉考―当代批判との関わり―」（『軍記と語り物』第二八号、一九九二年）、増田欣『中世文藝比較文学論考』第一章第五節「「北野通夜物語」の構造と思想」（汲古書院、二〇〇二年）、西山美香『武家政権と禅宗―夢窓疎石を中心に―』第Ⅱ部三章「『夢中問答集』における〈戦乱〉―「釈迦氏滅亡説話が支えたもの―」」（笠間書院、二〇〇四年。初出、一九九六年）がある。また三人の「からから」という哄笑の考察を行った樋口大祐『「乱世」のエクリチュール転形期の人と文化』第Ⅰ部第8章転形期とヒューモア「『太平記』における死・笑い・永劫回帰」（森話社、二〇〇九年。初出、二〇〇八年）、三人の議論から『太平記』の「多声的世界」を論じた大津雄一『挑発する軍記』第二部第三章「『太平記』の知」（勉誠出版、二〇二〇年、初出、二〇一一年）などがある。

（9）長坂成行「太平記巻三十五「北野参詣人政道雑談事」小考」（『名古屋大学軍記物語研究会報』第三号、一九七四年）。

（10）石田洵『太平記考―時と場と意識』「「政道雑談」の位置―天正本巻第三十八を中心に―」（双文社出版、二〇〇七年。初出、二〇〇四年）。

（11）大坪亮介『南北朝軍記物語論』第一部第一章「「北野通夜物語」と後醍醐天皇の怨霊」（和泉書院、二〇二〇年。初出、二〇〇八年）。なお、第二部第五章「天正本『太平記』における真言関係記事の増補」は、天正本の「北野通夜物語」における頼意の増補から、天正本と真言との関わりを論じる。

(12) 大坪亮介註（11）前掲書、第一部第二章「「北野通夜物語」の構想」（初出、二〇〇八年）。また、大森北義『『太平記』の構想と方法』第三章「『太平記』第三部世界の構想と方法」（明治書院、一九八八年）も、「吉野御廟神霊事」の上北面の言葉を「北野通夜物語」の法師が受けていると指摘し、「〝亡霊〟による歴史展望が打ち出されていた」と論じた。

(13) 大森北義註（12）前掲書は、巻三十三以降「『太平記』の「後半」世界の歴史叙述を貫いている筋」はこれら大名達の「没落と敗亡に焦点が当てられて進行している」と指摘した。

(14) 中西達治註（5）前掲書、Ⅲ「第三部の構成について」（初出、一九六三年）。

(15) 細川清氏の失脚記事は異同が多く、諸本の先後関係をめぐる議論がなされてきた。小秋元段註（5）前掲書、第四章「巻三十六、細川清氏失脚記事の再検討」（初出、二〇〇四年）は、畠山道誓が謀叛に介入したことを暗示する志一上人の発言、義詮が願書を取り寄せてみる記事を有する甲類本の形態を『太平記』本来の姿であるとする従来の論を批判し、それらの詞章を持たない乙類本・丙類本系統が先行する形態であることを明らかにした。丙類本系統に属する天正本の叙述だけに注目すると、畠山道誓も陰謀に深く関連があるとは読めず、また将軍を呪詛したとも明確には読めない。すなわち、天正本の記事から清氏の失脚譚を読むと、清氏は道誉の讒によって謀反の罪を着せられ、ほどなく宮方へ降参するようになったことがより明確に読める。

(16) 小川信『足利一門守護発展史の研究』（吉川弘文館、一九八〇年）は、仁木義長排斥事件の張本人は畠山道誓ではなく、細川清氏であったとし、『太平記』の叙述が事実を伝えていないと指摘したが、一方で、義長が土岐頼康、佐々木氏頼らと紛争があったことを示し、義長が恨まれる根拠を認めている。

(17) 石田洵註（10）前掲書、「『太平記』における仁木義長―「悪」の記述態度を中心に―」（初出、一九七九年）は仁木義長が悪人として強調されていることと、「北野通夜物語」の展望を結びつけ、「どうしようもない現実であるからこそ、希望にしか過ぎないような楽観的展望を示す以外に心の処理ができなかった」と論じる。

(18) 小秋元段「『太平記』古態をめぐる一考察―巻三十八を中心に―」（『中世文学』第五十三号、二〇〇八年）は没落後の兄弟の行動の異同に注目し、「今川家本の形態こそ怨霊の予告に対し、より相応しい対応をみせている」と述べ、甲類本の神宮徴古館本の詞章が後に改訂されたものとみている。ただし、天正本はこれらの詞章とは離れている。

(19) 第三節で列挙した簡略記事のなかには、⑥のように、事件の結果のみを述べるタイプのものもある。⑥の巻三十七「中国西

国蜂起事」には、諸本にある越中で挙兵した宮方桃井直常の過失による退却の記事がなく、「桃井播磨守終ニ打負テ、井口城ニ引籠レハ、自」是北国ハ富樫介ニ被」挑、其侭無為ニ為ニケリ」と簡略に北国の情勢を伝えるのみである。

(20) 和田琢磨『『太平記』生成と表現世界』第三章第四節「細川頼之の管領就任記事の位置付け」（新典社、二〇一五年。初出、二〇一一年）は「北野通夜物語は、世の人々が「唇 竭（ルツキ） 歯（ハ） 寒（サマシク）、魯酒薄（ロシュシテ）邯鄲囲（マル）」という、もはや現実社会を甘受せざるを得なくなってしまった頃に行われたということになるわけだ」と解釈している。

(21) 諸本の「北野通夜物語」の設定時期に関しては、巻三十付近から高まる作者の社会問題へ向けた関心に連関するとみる長谷川端註（6）前掲論文、延文五年との結びつきが明確でないとする長坂成行註（9）前掲論文、「悪人」仁木義長を一典型として時代背景にしたとする石田洵註（10）、註（17）前掲論文に詳しい言及がある。

(22) 天正本は、巻三十六「南方宮方国々敗北幷持明院主上自江州武作寺還幸」において、宮方が京から退いた後、北朝の後光厳天皇が還幸する記事に増補がある。神宮徴古館本が「供奉の月卿雲客は差たる行粧無かりしかとも、辻々の警固、隋兵の武士、渡も耀てそ見たりける」と簡略に述べるのに対して、「西園寺亭エ環幸ナル、供奉ノ卿相雲客ハ行粧モ無シカトモ、御警固ノ武士共綾羅錦繡ヲ裁衣テ、金銀珠玉ヲ展タレハ、…（中略）…誠ニ希代ノ壮観ナリ」とあり、その晴儀を詳述るが、天正本が幕府の都復帰後の北朝天皇の還幸に印象付けていることを指摘したい。

(23) 勢田道生「頼意僧正伝記考―南朝参仕の一僧侶歌人の生涯―」（『詞林』第四十号、二〇〇六年）は頼意が南朝に重用されていたことが述べられている。

(24) 長坂成行註（9）前掲論文は、実在人物の頼意を参加させ、「政道批判の蓋然性を強めている」と述べる。

(25) 鈴木登美恵註（1）前掲論文「古態の『太平記』の考察―皇位継承記事をめぐって―」。

<ABSTRACT>

Perceptions of Reality in Chapter 38 "Discussion of Political Matters" of the *Tenshōbon Taiheiki*: A Study of Chapter 35 and After

Lee Janghee

The latter half of the *Taiheiki*, which recounts the struggle between the Northern and Southern Dynasty in Japan, contains a passage entitled *Kitano Tsūya Monogatari* ("The Tale of the Wake in Kitano") in chapter 35.

Amongst the various texts of the *Taiheiki*, which appeared soon after its creation, the Tenshō-bon has the most peculiar version of the *Kitano Tsūya Monogatari*, different from all others. Firstly, the Tenshō-bon version differs in the moment at which the narration of the *Kitano Tsūya Monogatari* takes place. In the other texts the narration takes place at the time of the uprising of the Southern Dynasty due to internal conflicts within the shogunate government, following the events of chapter 35, "Yamana's Departure for Cyugoku. But in the Tenshō-bon version the narration takes place at a time when the Southern Dynasty had lost much of their momentum, following chapter 37, "The Battle between the Yuan Dynasty and the Song Dynasty".

Secondly, other texts' chapter 36, 37 and 38 in the Tenshō-bon are combined into two chapters, with a number of abridged parts. The abridged parts are mostly those concerning Hosokawa Kiyouji, who surrendered and was disgraced by the shogunate and was expected to join the Southern Dynasty. The Tenshō-bon does not describe his strategy or his bravery as a general, and his momentum is weakened in comparison with the other texts. It also does not describe in detail the important causes of internal conflicts and the roots of internal discord in the shogunate.

Finally, the Tenshō-bon text introduces the character of Hino Shōjo Raii,

the Southern Dynasty, as a witness to the discussion of political matters, coherently with the other peculiarities mentioned above. In the Tenshō-bon text Raii, after listening to the three men's discussion of political matters, realises that there will be no peace under the Southern Dynasty rule, and leaves with only nominal hopes for the future, saying: “I have only hope for the future, that these turbulent times may subside again”. This pessimistic conclusion to the Tenshō-bon is significant in that it confirms the decline of the Southern Dynasty. From what we have seen so far, the Tenshō-bon displays more awareness than other texts of the history of the failure of the Southern Dynasty uprising, which took advantage of the internal strife in the shogunate.